

先祖から受け継いだ日本人の心

国を愛するということ

愛国心の昂揚こうようなどと言っても、愛し得るねうち値打のある国というものがあれば愛するけれども、愛し得る国としての資格があるかわからん現状のような日本国では愛することができないというのは、それは国というものを、唯、単に形にあらわれている現状の国——即ち現象の国家——だけを日本国だと思つているために、こんな強盗や、強姦や、失業者や、ストライキや、戦争や、



つまらないことばかり充滿している此こゝのような国家は、愛することはできないということになるのでありますけれども、その現実の奥に「理念の日本の国」なるところの、目に見えざる「国の本体」なるものをみたならば、其そ処こゝに希望が生まれ、其その国こゝろに生きていることに、生甲斐いきがひを感じ、其その国を愛することができるのであります。外面の現象は如何いかにもあれ、それを内在の理念——理想に近づけて行くところに希望が持て、勇気が出、生甲斐が感じられて来るのであります。此の肉眼には見えないけれども、既に在るところの日本をつくり出した「完全模

型」即ち「実相」というものを、智慧に依つて直観して、それを見出し、そうした完全模型(理念)に向つて、国を推し進めつつある日本国民が自分だ、という自覚が出て来たときにのみ、本当に日本人としての生甲斐が感じられてくるのであります。(新版『真理』第7巻・272〜273頁)

「大和の理念の国」日本

日本の国は「大和の理念の国」なのである。詳しく言うならば瑞穂の国である。「ミズホ」の国とは、水火国なのである。水は陰であり、火は陽である。「陰陽和合の理念」である。陰(西欧)と陽(東洋)とは和合しなければならぬのである。その契機を司る「大和の理念」こそ日本の国なのである。陰(物質)と陽(霊)とは和合しなければならぬのである。その契機を司るのが「大和の理念」であるのである。

日本国を「領土」と「主権」と「国民」との混合物の如きバラバラの単なる現象的存在として考えるが故に、



領土の一部が削られたり、「主権」が一時停止せられたりしたならば、日本国の「久遠永統性」(天壤無窮)が中断された如く考えるのであるけれども、それは国家なるものを唯物論的に、そしてただの「現象」として観ているのであって、国家の実相を見ているのではないのである。(新版『真理』第4巻・77頁)

日本の精神は風呂敷精神

日本民族は、人類互に相和そうと云う理想をもつて、国をはじめたのでありまして、「大和」の国号がそれを示しているのであります。これが日本建国の精神なのであります。「形は心をあらわす」と云う諺がありますが、日本人の発明した風呂敷を見ればわかります。風呂敷はどんな形のもでも、その形を毀さずに一緒に包んでしまふことが出来るのであります。他の国を毀して併呑するのは霸道であつて、日本の皇道ではありません。日本の精神は風呂敷精神であります。総ての物を毀すことな

く一つに包んで「人類」と兄弟となり一家族となるのを建国の理想としているのが日本民族であります。（中略）

「人類は互（たがひ）に一つだ」と云う大和（だいわ）の精神が日本精神でありますから、日本の建国の理想は「愛」だと云うことが出来るのです。「愛」と云うのは、どの人種も、元（もと）は一つと云う自己一体の自覚であります。自分と他（ひと）とは形の上では別々であつても、生命は一体だと云う自覚です。「私（わたし）はあの人を愛する」と云うことは、あの人と私とは本来一つである。そこで彼の喜びを私の喜びとし、彼の悲しみを私の悲しみと感ずる、これが「愛」であります。それは、或（ある）は男女の恋愛のようにも現われ、或は父母親子の愛と云うような関係にも現われ、或は家族が一体であると言ふ感じの家族愛と云うものになつて現われ、或は国を愛する愛国心ともあらわれ、或は人類を愛する人類愛ともなつて、あらわれます。吾々（われわれ）はこれらの色々の愛を、その内の一つでなく、みなことごとく調和した相（すがた）で愛し得（う）るように努力するとき、偏（かたよ）つた人間ではなく「全（ぜん）人」としての完全な人間の魂（たま）がみがかれるので



あります。

（新版『真理』第3巻・232〜233頁）

日本民族の精神を象徴するもの

日本民族は総（すべ）てバラバラに分かれているのを一つに綜合（ごうごう）するところの天分（てんぶん）を持つていたのでありまして、日本の国の名前を「大和（やまと）」と名づけられたということも、「や」というのは「弥（いよ）々」と云う字が当てはまるので、いよいよ多いという意味であります。「ま」というのは「纏（まと）める」という意味であります。弓で射る「的（まと）」を「ま」というのも、同じことでありまして、中心に「纏（まと）まつて」いる姿を現わしています。いろいろに分かれていても、その悉（ことごと）くが一つに纏（まと）まるべきものであつて、決してバラバラのものは存在しない、宇宙は一つである、世界は一つであるといふところのその人生観が、古代の日本民族を通して現在の日本民族に至るまですつと貫（ぬ）き通しているところの民族的信念とでもいふべきものなのであります。（新版『真理』第3巻・241頁）